

武蔵野を協同の大地に変えた川崎平右衛門

合唱構成劇

武蔵野の歌が聞こえる

共同企画 シニアSOHO小金井
NPO現代座
脚本構成 木村 快

2014年9月 上演予定



【江戸近郊八景の内 小金井橋夕照 歌川広重】

本作品の創作意図

本文は上演台本で扱う物語の背景についての概要です。

二〇一〇年五月、NPO現代座が「揺れる時代を生きた男・小金井小次郎」を上演した際、小金井シニアSOHOの皆さんから、江戸時代に小金井を含む武蔵野を拓いた川崎平右衛門を市民に知らせる演劇が出来ないかとの提案がありました。そこで、地域文化おこし有志で「川崎平右衛門プロジェクト」を発足、以後四年間、勉強会を続けて来ました。

今回の作品制作の意図は川崎平右衛門の伝記ではなく、不毛の大地と言われた武蔵野台に、なぜ新しい村々が誕生したのかを探ることです。

元禄から享保への幕政改革期は、日本近世の時代の変わり目でした。元禄の大地震、宝永の大地震によって大きな打撃を受けた時代、その復興のための試行錯誤は日本社会の大きな転換期となっています。

特に困難をきわめた武蔵野新田の開発は、初期には農民の離散を招き、挫折の危機に直面します。しかし、幕府の要請を受けてた平右衛門は、農民の立場で新田復興を図り、農民自身の助け合い精神を引き出すことによって、ついに協同の村を完成させます。

こうした「享保の改革」における試行錯誤は現代社会にとっても大きな教訓となるはずで

木村 快

武蔵野の歌が聞こえる

一、宝永大地震と享保の改革

【合唱】富士が燃える

◆富士山の噴火

それは宝永四年十月四日のことです。西洋歴でいうと一七〇七年ですから、今から三〇六年前のことになります。関東から紀伊半島、四国、九州にかけて、日本歴史上最大の東南海地震が発生します。これはこのたびの東日本大震災とほとんど同規模、あるいはそれ以上の大地震だと言われています。世にいう宝永の大地震です。その上、大地震から四十九日後の十一月二十三日に今度は富士山が大噴火をおこします。

当時、富士山はこの多摩一帯からもすつきり見えませんでした。その富士の七合目あたりから黒い噴煙を噴き上げながら、時折真つ赤な炎が貫きます。噴火は十六日間つづき、推定十八億トンもの火山灰・火山礫が噴出



富士山東側に現在も残る宝永山の大噴火口

されたと言われています。灰は風の流れて神奈川、江戸周辺の村々を襲い、農業は大打撃を受けます。火山灰は江戸の街でも五センチは積もったという記録が残っています。

火山灰や瓦礫が河川を埋め、富士から駿河湾へ注ぐ酒匂川は大洪水に襲われま

あり、沿岸の村々は洪水対策を急ぎます。多摩川べりの押立村は古くから洪水対策の中心的な役割を担う村でしたから、村人は富士山の噴火を見守ります。その中に十四歳の辰之介少年がいました。後の川崎平右衛門定孝です。父安信は押立村の世話役を務めていました。安信は被害の長期化を予感し、辰之介にその覚悟を持たねばならぬと言いつけさせます。

◆混乱する幕府

第五代将軍綱吉は大地震の二年後に亡くなります。代わって徳川家宣が第六代将軍になりますが、大変苦勞が多かったのでしょうか。わずか三年で亡くなります。つづいてわずか四歳の徳川家継が第七代将軍となりますが、この家継も七歳でなくなります。

大地震から十年もたっていないのに、三人の将軍が相次いで亡くなり、幕府内は混乱するばかりです。災害からの復興は全く進みません。徳川家康が幕府を開いてから百四年目のことです。

ここで登場してきたのが徳川御三家の一つ、紀州和歌山藩の藩主、徳川吉宗です。のちに講談や時代劇では「暴れん坊将軍」などと言われる型破りの将軍ですが、実際には破綻しかかった徳川幕府を立て直した改革政治家として評価される人物です。

吉宗という人は紀州藩主徳川光貞の四男に生まれましたが、事情があつて山里を支配する加納家に預けられ、子どもの頃から山野を駆け回って育った人です。本来ならそのまま生涯を終わつたかもしれないのですが、兄たちが次々と病死し、思いがけず藩主に押し上げられたわけです。

紀州藩は宝永の大地震では最も大きな被害を受け、津波によって多くの農地を失いました。野育ちの吉宗

は一般の大名と違って、自ら復興の陣頭に立ち、家臣農民と共に震災からの復興に励んでいます。特に注目を集めたのは、農地の回復だけでなく、和歌山を貫く紀ノ川から新しく灌漑を引き、新田開発をすすめて以前より農地を拡大したことでした。こうして、莫大な負債を抱えていた紀州藩を見事復興させています。

吉宗が将軍候補として注目されたのは、紀州藩が最大の被害を受けながら、見事復興を遂げた実力者であつたからだと思われれます。

◆八代将軍徳川吉宗

享保元年、これは一七一六年にあたりますが、徳川吉宗はついに第八代将軍に就任します。宝永大地震からは九年後のことです。震災発生時、幕府は全国の大名から莫大な復興資金を集めておきながら、それを復興資金にはほとんど使わず、幕府財政の赤字の穴埋めや、大奥の御殿の増築に使つたりして、吉宗が就任したときは四十万両（現在の評価では四百億円）の負債を抱え、破綻寸前の状態でした。

幕府の仕組みを抜本的に作り直さなければなりません。吉宗は社会全体に目配りの出来る南町奉行として、かねてから目を付けていた大岡越前守忠相を抜擢します。

大岡越前守忠相（おおおか・えちぜんのかみ・ただすけ）と言えば時代劇ドラマでは大岡裁きとして知られる名裁判官ですが、実は大岡裁きの話は大部分が後の世に創作された話であつて、本当の大岡忠相は将軍吉宗を助けて、荒廃した国土の復興をやりとげた行政官僚として功績のあつた人物です。

将軍吉宗が世襲の役人に頼らず、二千石の旗本に

過ぎなかつた大岡忠相を抜擢したように、大岡もまた復興の進めぬ農業を改善するため、世襲の役人に頼らず、農民の中から農政についての見識を持つ人物を次々と抜擢します。同時に、国土開発や農政現場の実情を調べ、いざというときに抜擢できる有能な人物にも目を配っていました。

この大岡忠相を軸に据えた幕府の改革は「享保の改革」と呼ばれ、つぶれかかった徳川幕府を立て直した改革でした。享保の改革は人によっていろいろ評価が分かれるところですが、庶民の視点から政治のあり方を考えようとする目安箱の設置、貧民救済施設としての小石川養生所の開設、火消し制度など防災対策の普及、学問の面でも漢訳による西欧文献の導入など、近代につながるさまざまな制度を確立した改革でした。

一、困難な新田開発

◆新田の開発

享保の改革の目玉はなんとと言っても新田の開発です。吉宗自身、和歌山藩主時代、宝永大地震の被害から藩を回復させるため一番力を入れたのは、荒れた田畑の復興だけでなく、新しい農地の開発でした。

この時代、推定によれば日本の人口は二千七百万人と言われていますが、江戸の町は既に百万人という世界一の大都会になっていましたから、何とか食糧を確保しなければ、中心都市の江戸が崩壊してしまいます。

享保八年、宝永の大地震からすでに十五年、吉宗が就任してから八年目ですが、吉宗と大岡忠相は大規模な新田開発に乗り出します。幕府は武蔵野台と呼ばれる、現在の東京都杉並から三鷹、小金井、国分寺、砂川、それから北側に向かっては小平、清瀬、埼玉県所沢、

入間、鶴ヶ島までつながる広大な荒地を畑にするこゝとでした。

武蔵野台は何の作物も育たない荒地で、元禄元年（二六八八年）の幕府の記録では「開発不能の地で、武蔵野の端々の農土のいか程ありても、さして御用に立たず」となっています。武蔵野台は関東ローム層といつて、富士、箱根、浅間山の火山灰が風化して出来た赤土の粘土層です。保水能力がなく、作物を育てるだけの養分もない、まさに不毛の大地でした。それを承知の上で開発に挑まなければならなかったところに、当時の幕府財政の厳しさがありません。

各村々に幕府からの通達が届きます。名主は早速新田開発の志望者を集めます。幕府にとっては大きな賭けですが、関東一円の畑を持たなかつた貧しい百姓たちの間では大きな期待が生まれます。

この小金井でも、押立新田、梶野新田、関野新田、下小金井新田、是政新田、貫井新田、鈴木新田の開発が割り当てられました。それまで自分の畑がほしくても畑を持たなかつた農家の次男三男は実情を知らないまま、たくさん集まってきます。そしてつぎつぎと新田の開発が始まることになりました。

【合唱】新しい村をつくれ！

◆厳しい新田開発

幕府の開発がはじまった翌年、あの富士の噴火を見守っていた押立村の少年、辰之助の父平右衛門安信が亡くなります。辰之介は父の名跡を継いで八代目平右衛門となり、府中・押立村の名主に選ばれていました。

押立村の新田は武蔵野台地の小金井原と呼ばれる場所でした。少年時代から父の教えに従って土と作物の

相性を調べ、各地を訪ね歩いてきた平右衛門ですが、さすがに新田開発には相手手こずっていたようです。いったいどうやってこの土地を畑にするつもりなのか、いったい何を植えるのか。どの村の名主も頭を痛めていました。

予想通り、新田開発はそう簡単には進みませんでした。新田百姓たちは一生懸命木を伐採して畑を拓くのですが、まず水が足りません。雨の降らない日が続くと、作物はすぐ枯れてしまいます。そして空つ風が吹くと真っ赤な土ほこりが舞い上がり、家中までほこりが積もります。

新田開発農民は、三年間は幕府から生活資金と農具代が支給されますが、三年たつと年貢を払わなければなりません。

新田開発の役人のことを地方役人（じかたやくにん）と言いますが、地方役人は年貢を徴収するための役人ですから、容赦なく年貢を絞り上げる力を持つ者が任命されました。最初に任命された地方役人は紀州の浪人・野村時右衛門と小林平六でした。彼等は早く年貢を取りたてて成績を上げると正規の幕府役人に取り立ててもらえることになっていました。そのため、まだ百姓自身が食べるものも十分に確保できていないのに、きびしい取り立てをはじめます。

「慈悲を」と懇願する百姓に対して、「お上に慈悲などない！」と突っぱねる役人たち。

そうした光景は平右衛門の心を痛めました。平右衛門の新田の隣には妹婿の小金井村名主、関勘左衛門のひらく関野新田もありました。

「平右衛門さま、見ておられたか？」

「おお、勘左衛門か」

「わしら名主の立場ではどうこう言うことは出来ぬ

が、お上のやり方はひどい。あれじゃあ新田百姓はみんな逃げ出すわ」

「あの役人は北町奉行中山様の配下だから、年貢の取り立てをあげれば、幕府のお抱えにしてやると言われているらしい」

「新田開発が始まってから十年もたつのに、このままじゃむつかしいぞいますなあ」

「百姓あつての新田開発のはずだが、このままじゃ立ちゆかぬ。小金井村の方はどうだ？」

「だめですな。とてもまともな作物は出来ません。それでもわたしの方は村の外に張り出す新田だから、村からの通い百姓でなんとかやっておるが、遠くから来てここへ住み着いた出百姓はやっていけませんな」

「そつだな」

「われらも小金井に居着いてから百年になるが、わしらが畑に出来なかつた土地を畑にするのなら、どうやって土をつくるのか、何を植えたらよいのか。お上はそこをどう考えておられるのか」

「役人の方は命令するだけで済むが、つぶされるのは百姓だからな。わしらでなんとかやり方を見つけ出さねばならぬ」

「ほう、栗が実をつけ始めましたな。しかし、栗ではなあ」

「いや、栗は麦や野菜のようにすぐにといいわけにはいかんが、三年もたてば実を付け始めるし、五、六年たてば江戸で売ることが出来る」

「売れますか？」

「江戸では栗は結構売れている。だが、息長く見なくてはならぬ。だから年貢の免除は三年で打ち切るのではなく、土をつくり、土にあつた作物を見つけ出すまで、もう少し息の長い開発が必要だ」

◆逃げ出す百姓

【合唱】 苦しみ

「おーい、次郎、待て。どこへ行くだ」

「五助か。見ての通りだ。おらあ村を出る」

「村を出てどこへ行く？」

「江戸の弥助のそこへ行ってみる。人足の仕事があるそつだ」

「人足か」

「自分の畑を持てる日が来ると思ったが、鋤下（くわした）年季が明けても年貢なんか払えやしない。今年こそ何となるかと思つたが、日照つづきで、今年の麦もだめだ。もう食う物がな」

「お前も弥助もいなくなれば、わしは一人になる」

「こんな水も出ない土地で、新田開発なんかできるわけがねえ。わしらはお上にだまされたのだ」

「俺も出たいのだが、おつかあが寝こんでるからどうにもならぬ」

「そのうち目途がついたら、呼びに来てやる」

「頼む。達者でな」

三、一難去つてまた一難

◆異色の地方（じかた）チーム

享保の改革も、当初はかけ声ばかりで実態はなかなか進みませんでした。タデマ工は叫んでも、それをどう進めるかということになると、大きな組織を担う役人の考え方はそう簡単には変わりません。事業の目的

より自分の地位を守ることを大事にするため、「お上に御慈悲などない！」と言つことになりがちです。

そこで大岡は民間から農業や治水の専門知識を持つ農民指導者や農政学者を集めて、治水・新田開発専門の地方（じかた）のチームを作ります。このチームはそれまでの役人グループと違って、大岡を「御頭（おかしら）」と呼び、自由に議論し、率直に意見を述べ合うことが出来ました。

地方（じかた）チームに町奉行与力であつた上坂安左衛門政形がいました。上坂は奉行所でも大岡の側近として仕え、裁判法令集の編纂などを手がけており、民間の知識人との絆を持っていたと思われます。農業の専門家ではありませんでしたが、現場の状況をよくつかみ、たくみに人を組織する力を持つていました。

◆新代官・上坂政形

吉宗・大岡の努力の甲斐あつて、幕府財政はかなり持ち直してました。しかし、武蔵野新田開発は思うように進みません。

開発が始まってから十年目の享保十七年、とうとう心労がたたつてか武蔵野代官の岩手藤左衛門が亡くなります。代わつて、大岡の部下、上坂安左衛門政形が新しい代官に任命されます。

上坂はこれまでの代官と違って、名主たちの集まりにもよく顔を出し、百姓と一緒に新田開発を進めようとする気概にあふれていました。どうやらこの武蔵野にも一筋の灯りが見えてきたようです。

◆享保の大飢饉

上坂が代官になつた年の夏、西日本一帯は夏に

なつても気温が上がらず、その上、害虫が大発生して大飢饉が起こります。江戸三大飢饉の一つ、「享保の大飢饉」です。飢え死にした者一万人、飢饉に苦しんだ者二百五十万人と言われます。

米価は跳ね上がり、江戸市民は米を買うことが出来ず、享保十八年正月、市民による米屋打ち壊しが起こり、江戸の町は大騒ぎになります。

その上、幕府は西日本の各藩に緊急支援対策として三十万両の貸し付けを行わなければならず、幕府財政はまたまた火の車に追い込まれます。

だからこそ、なんとしても武蔵野新田の開発は成功させなければなりません。

享保の飢饉から三年後の元文元年、やっと大岡忠相による最初の武蔵野新田検地が行われます。開発がはじまってからすでに十四年がたっていました。それでもどうやら具体的な計画が立てられるようになり、一息ついたところで。

◆武蔵野新田をおそう元文の飢饉作

ところがその翌年、元文三年から四年にかけて、雨が全く降らず、今度は武蔵野新田が飢饉に襲われます。さらに翌年も雨は降らず二年つづきの凶作となり、働ける者はみな江戸へ出稼ぎに出て、女子ども年寄りが残され、人も馬も次々と餓死しはじめます。これではもう幕府も新田開発については打つ手がありません。

新田の惨状を知った將軍吉宗はひそかに代官上坂安左衛門政形を直接奥の院へ呼びつけます。

「老中の話では武蔵野新田では飢え死にした者が出ておるそうではないか」

「まことに申し訳ございません。昨年の春、秋、そして今年の春と、二年つづきの日照りで大変な凶作でござ

います」

吉宗は「新田開発はなんとしてもやりぬかなければならぬ。即刻対処せよ」と命じます。

上坂政形は大岡忠相に事の次第を告げます。

「南北武蔵野八十二ヶ村、どの村でもつづれ百姓が出ております。特に小金井では貫井新田二十五軒のうち十三軒が「つづれ」、梶野新田では三十七軒のうち十二軒、是政新田二軒のうち一軒、関野新田、下小金井新田でも数軒づつ「つづれ」が出ております。飢え死にした者も出ております」

「つづれ」とは再起不能の農家を指します。

このとき、大岡は上坂に、かねてから目をつけていた押立村名主、平右衛門の協力を受けて百姓お救いはかるよう命じます。

◆上坂代官と平右衛門

平右衛門は上坂からの知らせを聞くと、村人を集め新田百姓救済のための準備を始めます。上坂が到着したときにはすでに準備が整っていました。

上坂は幕府でお救い米の準備をすすめているのだが手間取っている事情を話します、

「事は急を要します。わたしどもの蔵に蓄えてあるものを運びましょう」

「この村の蔵からか？」

「こついつ時こそ百姓同士が助け合つ心意気を持たねばなりません。そのためにも百姓の仲間内から動き始めるのがよろしいかと思ひます。まず人を集めやすい小金井橋からはじめましょう。小金井橋でお救い米配りが始めれば、噂はすぐ武蔵野全体に広がると思ひます。みんな元気が出るでしょう」

「おーい、村の衆、これからお救い米を積んで小金井橋へ行くぞ！ 新田村の衆にお救い米を配るぞ！」

村人は大八車に米俵を積み上げ、一斉に小金井橋へ向かつて急ぎます。

【合唱】小金井橋へ

◆人間らしさを取り戻せ

小金井橋に着いたのはまだ夜明け前でした。そこにはすでに小金井村の閑勤左衛門や貫井村の鈴木利左衛門ら一同が待ち受けていて、男衆は家々をたずね、お救い米を配るから、大人も子どもも小金井橋に集まるようにと伝え、女たちは大釜でお粥をつくりはじめます。

「おーい、村の衆、集まれえー！、これからお救い米を配るぞ！」

村人が集まってきました。

小金井村の勤左衛門が叫びます。

「さあ、みなの衆、押立村の衆がお救い米をとどけてくださったぞ！」

平右衛門は晴れやかな笑顔で語りかけます。

「みなの衆、お上からお救い米をくださることになった。だがな、それよりもまず粥じゃ、粥を食ってくれ」

「お粥をいただけるのですか」

「そうじゃ」

「お願いします」

「お願いします」

飢えた人々は殺到します。

「待て、待て、みんなに渡るから、慌てるでない。さあ、子供と年寄りが先だ。そこのじいさん、ばあさん、

「こっちへ来なせえ」

「ほり、太郎よ、お米の粥だよー」

「そつだ。すきつ腹に急に工飯なぞ詰め込むと体を壊すからな」

「ありがとうございます。ありがとうございます」

「さ、ここに積みあげたのはお救い米じゃ。それぞれの村の名主殿に申し出て、持ち帰るように。それから、お上から改めてお救い金が出るから、まず安心して畑仕事の準備にかかるがよいぞ」

飢えた百姓たちは目をぎらぎらさせてわれがちに押し寄せましたが、平右衛門の指示によって、しだいに落ち着きを取り戻していきます。百姓たちはお救い米をいただき、夢かとはかり抱きしめています。来たときと違って、大人も子どもも、お互い見合わず顔は生き生きと輝いています。まるでお祭りが始まったような、暖かく和やかな賑やかさに包まれています。

この光景を見ていた上坂政形は平右衛門の見事な手際に驚き、大きな感銘を受けます。

新田開発はこれまで上から叱りつけるような形で進められてきました。しかし、平右衛門は百姓の中に眠っていた人間としての力を引き出しています。

この小金井橋でのお救い米配りはまたたく間に八十二ヶ村の村々に伝わり、お救い米配りが続けられます。それは飢えた百姓に施しをさすけるというより、一堂に集まった人々を上げまし、新しい希望を生み出し、生産への意欲を蘇らせる出来事でした。

四、新田回復は可能か

◆新田世話役となる

この小金井橋のお救い米配りは、幕府の中でも大きな話題を呼び、幕府はその功績を讃え、平右衛門に銀十枚の褒美を出すとともに、名字帯刀を許します。平右衛門の家は徳川以前は後北条家の家臣でしたから川崎という苗字がありました。徳川幕府が始まってからは苗字を名乗ることができず、押立村の平右衛門と呼ばれていました。以後、川崎平右衛門定孝(さだたか)と名乗ることになります。

この年の夏、元文四年八月、平右衛門は大岡の要請によって武蔵野新田世話役となります。新田世話役とは上坂代官の下で現場の実情を調べ、百姓たちの希望を聞き取り、具体的な対処法を代官に上申する仕事です。新田世話役には二人の部下がつかまいます。平右衛門は、同じ押立村の百姓・高木三郎兵衛と、府中宿の商人であつた矢島藤助を配下に付けます。

平右衛門は南武蔵野の陣屋を関野新田に置きます。これは小金井陣屋と呼ばれ、現在の小金井公園と五日市街道の間にありました。そして北武蔵野の陣屋は現在の鶴ヶ島市高原にある三角原に置き、新田開発の指導に専念します。陣屋とは役所、社宅、倉庫、馬小屋などを備えた館のことで、関野陣屋は記録によれば間口十八メートル、奥行き九メートル、北側に水堀があり、残る三方を土山で囲み、南正面には馬に乗ったま出入りできる門がありました。三角原陣屋は現在も遺跡が残っており、南武蔵野陣屋の二倍近くあります。

◆百姓の心情をよく知る人材として

ところで、この厳しい現状で幕府側の役職に就くと

いうことは農民を支配する側に立つことですから、平右衛門としてはよくよく考えた上での決断だったと思われまます。支配する側に立つのか、それとも百姓が人間らしく生きるための道筋をつくるのか。

大岡忠相や上杉政形が、百姓側の心情をよく知る人材を求めていることだけは確かでした。平右衛門も三郎兵衛も矢島藤助も同じ百姓町人出身ですから、百姓と同じ立場で話し合い、支配側からは見えなかつた新しい道筋を見つけて出すことが求められていたのです。

平右衛門はまず、小金井村の関勘左衛門、貫井村の鈴木利左衛門を伴って、一軒一軒農家の実情を調べて歩きます。凶作の傷跡は深刻でした。

このとき、武蔵野新田全体の出百姓家数は千三百二十軒ほどでしたが、救済を受けずに続けられる百姓は九軒しかなく、どうにか続けられる百姓が二十六軒で、これらも凶作で痛手を受けており、いつまで続けられるかは判断できません。それ以外ほぼ全滅という状態でした。

新田開発が始まって以来、名主グループでも情報を集め、対策を練ってはいましたが、一軒一軒訪ね歩いてみると、とても当面の資金や食料の援助だけでは立ち直れないことが読み取れます。どうすれば村人の活力を蘇らせることができるかが最大の問題でした。

◆大人も子どもも老人も

平右衛門はまず、村民救済のための「お救い普請」として、村民による井戸掘りを企画します。

「おーい、みんな集まってくれー」

村人が集まると、平右衛門は穏やかな顔で、村人

に語りかけます。

「皆の衆、これから村で必要なことは江戸の商人に頼まないで、自分たちでやることにしよう。ついではこの大きな井戸を掘るつもりじゃが、やってくれるか？」

村人は静まりかえります。食べるものにさえ事欠く自分たちに、井戸掘りの仕事を押しつけられるのは、出来れば遠慮したいというのが本音です。

「さて、皆の衆、ここに五つの札がある。この札にはそれぞれ『仁・義・礼・智・信』と書いてある。鍬を振って力仕事をする男には『仁』の札を渡す。仕事が終わったら麦を三升やる」

「えっ、麦三升？ ほんとですかい？」

「ほんとくだ」

村人の目つきが変わります。

「次……、もつこを担げる女には『義』の札を渡す。これは麦二升だ」

「女にもくださるんですか？」

「ああ、やりますとも、やらせて下さい」

「次……、ざるでモノを運ぶことの出来る年寄り、子どもには『礼』の札を渡す。これは麦一升五合やる」

「子どもにもくれるんですか？」

「子どもも大事な働き手だ」

「このとき、ひとりの女がとぼとぼと離れていこうとします。」

「これ、これ、その女、どうした？」

「わたしのうちにはもう何にも食べるものがありません。なんとしても働きたいのですが、ご覧のように、わたしは赤ん坊をおぶっています」

「このとき、おばあさんが思わず声を上げます。」

「その赤ん坊はわたし預かるうじゃないか。わたしは

もう何にも出来ないが、赤ん坊くらいあやせるよ。あなたは働かせてもらいなさい」

「そつだ、そういう助け合う心が一番尊い。女はいつも人の目のつかないところで苦労しておるからな。みんな、よく聞かえよ。子どもの守の出来る者には年寄りでも子どもでも『智』の札を渡す。この札を持った者には麦一升やるよ。」

「まあ、なんとありがたいことで……、なんまいだあ、なんまいだあ」

「それではおばあさん、この子をよろしく頼みます。わたしは一生懸命働かせて貰います」

「さて、みな衆、もう一つ札が残っておる。……この『信』の札じゃ」

一同は静まりかえって平右衛門のかぎす札を見守ります。

「この『信』の札は、小さな子どもにやる。子どもには麦五合を渡す」

「ええーっ、子どもにもくれるんですか？」

「でも、こんな小さい子はだめでしょう？」

「いや、赤ん坊にもやる。子どもは大事な村の宝だからな。親たちは安心して働くがいい。その赤ん坊をおんぶした女は『義』の札だから麦二升。赤ん坊を預かったおばあさんは『智』の札だから麦一升。その赤ん坊は『信』だから麦五合やるよ。」

「ありがとついでいいます。もう年寄りは村を出て行かねばならぬかと思いましたが、ああ、この村へ残ってほんとによかった」

「いいか、力がある者は力を出せ。知恵がある者は知恵を出せ。心優しい者はみんなに優しくしてやれ」

大人も子供も年寄りも夢中になって働きます。

「おーい、水が出たぞー!!」

「おお、水だ、水だ」

「さあこの水を畑へ流せ」

人々の胸にはこの荒れ土の武蔵野が、みどり豊かな武蔵野に姿を変えていくのが見えるようになっていた。

こうして村中の男から、母親たち、老人から子どもまでが一緒に村おこしに立ち上がったのです。だからもう、大人も子どももみんな一生懸命働きました。そして江戸の商人に仕事を頼んだ場合の半分のお金で出来あがりました。

こうした井戸や、水を引く公共の事業にかかる金は幕府から支給されますが、村人による工事は、幕府の支出も少なくて済みます。しかし、経済的効率より、村人が自分の村を造るという実感を強く持ち、一緒に働くことで、お互いの心が結ばれ、助け合いによる豊かな心を育てます。

以前は十分に食べるものなかった村人も、一家が安心して食事をとることができるようになります。人々は笑顔で挨拶するようになり、村全体が明るくなりました。

平右衛門のこうした仕事の進め方は、代官の上坂安左衛門や大岡忠相を驚かせます。それまで大きな工事は江戸の商人が請け負うのが普通でしたが、平右衛門は若い頃から、多摩川の治水工事などで近隣の百姓による協同作業で成果を上げていました。その実績は幕府から高い評価を得ていました。

平右衛門は村人だけで掘削を進められるよう入念な計画を立て、村人が一緒に働くことで心を一つにまとめあげ、お互い助け合うようになることを目指

していました。その結果、みんなが公共の設備に愛情を持つようになり、工事を安く済ませた分は、村の財政にあてました。

五、協同の村

◆百姓組合を作れないか

平右衛門は八十二ヶ村を歩いてみて、貧しい百姓達はまず肥料を購入することが出来ない現実を知ります。この武蔵野の土地はもとも作物の栽培には適さない土地です。この土地を改良していくためにはかなりの量の肥料が必要です。しかし新田農民は経験も浅く、資金の持ち合わせもありません。この赤土の畑で、貧しい百姓が土をつくり、よい作物をつくるにはどうしたらよいか。

平右衛門は名主としての豊富な経験を持っていきます。この劣悪な土地で生きて行くためには、効果的に肥料を使って換金率の高い作物を栽培させたいと考えます。そのことによって土質も改良していくことができます。肥料を選んでうまく使えば、換金率の高いハトムギ、ヨクイニン、ムラサキなどの薬草が栽培できるでしょう。これらは当時の江戸では貴重品として求められていた作物です。そのためには、米ぬか、油かす、小鰯など、価の張る肥料を調達する必要があります。そのための資金をどうするか。

できれば幕府が肥料代の資金を立て替えてやれるといいのですが、先の享保の大飢饉で、幕府は救済のために莫大な資金を使い果たし、金蔵が空になっていることは周知の事実です。先の見えない新田開発に新たに資金を出してもらうことは無理でしょう。また、百姓に少々資金を貸し与えても、それを個人任せにした

のでは、まだこれからの村ですから、強い者は生き残っても弱い者は取り残されてしまつてしょう。

やはりみんなが協力し合つて、まとまるやり方を考え出さなければなりません。百姓が一つにまとまれば、いろいろなことが出来ます。

まず、農閑期にまとまって肥料を調達すれば、江戸の市場では半値で仕入れることができます。肥料が半値の時を狙つて大量に購入しておき、陣屋に蓄えておけば、肥料が必要な時期に、誰にでも必要なだけ、半値の肥料を貸してやることができます。当然作物の品質がよくなり、収穫量も増加するでしょう。その収穫物の買い取りも商人任せではなく、直接買い上げれば、商人の利益分を差し引いて、市場より二割高で買い上げることが出来ます。

肥料は半値で貸し渡し、収穫物は一割高で買い取る。貸し付けた肥料代も二割高に換算した穀物で返済させる。そうすれば一々お金を仲立ちにしなくても肥料を渡し、穀物で返させるだけですみます。

まとめて肥料を買い、百姓に貸し渡し、百姓から収穫物を買いとる。これをお上に頼らず百姓自身がやるとしたら、百姓による組合を作る必要があります。歴史のある村ならそれなりのやり方があるでしょうが、見ず知らずの人間が集まつて生まれた村ですから、まずお互いが知り合い、助け合える習慣を育てなければなりません。

百姓組合が実現すれば、百姓の暮らしが楽になるだけでなく、新田全体の基礎が確立し、増産によって年貢の上納も増えるはずで、さらに、村人の助け合い精神を高め、役人たちが上から管理しなくても、百姓たちで話し合いながら自主的に進めることが出来るはずで、

百姓組合は地理的条件があるので、南と北でそれぞれまとまるとして、一組合が必要です。

平右衛門の計算ではこつした仕組みを育てるには年間三百六十五両の資金が必要だとわかりました。そこで三百六十五両の資金をどうやって捻出するか問題になります。

◆養い料組合の提案

平右衛門はこつした考えを上坂代官に提案します。そして、資金については幕府からの出金ではなく、元金として五千三百六十両を六年間貸して欲しい。そうすれば江戸市中で資金を必要とする商人や富農に年利一割で貸し出し、元金には手を付けず、その利息金だけで新しい営農体制をつくり出すことが出来ます。さらに荒地を開発して新しい新田を拡大し、同時に凶作に備えた備蓄をすすめ、百姓の生産意欲を高めて年貢を増加させ、病人の手当てもできる。そして六年後には全額元金をお返しするというのです。

それまで開発貸付金という制度はあったのですが、「開発させる」という立場から、自立した百姓を養い育てるといふ心で「養い料金」とします。

こつした考え方は突然上坂に提案したというより、新田世話役として上坂に日常報告しながら、上坂と話し合いながら一緒にまとめたものでしょう。

上坂はそれを平右衛門に目論見書としてまとめさせます。

◆「平右衛門心一盃」

平右衛門の目論見書を見て、大岡忠相は驚きます。新田開発に当たっては「百姓の目で見よ。百姓の

頭で考えよ」というのが大岡の方針でした。

「それにしても途方もないことを考え出したものだな。なるほど、同じ百姓でも上から命じられたときの百姓と、おのれがやろうとするときの百姓では力の出し方は何倍も違うのだな。平右衛門は百姓たちに途方もない力を発揮させる男だ」

そこで上坂は進言します。

「これまでは些細なこともいちいち平右衛門より目論見書を出させ、わたしが目を通した上でお頭のご判断を伺い、その上で平右衛門に指示しておりましたが、これより先は、新田のことはすべて平右衛門の思つがままにやらせてはいかがでしょうか。その場で自由に判断来ますし、仕事も早く進みます」

「それがよい。新田開発の儀、平右衛門の心一盃にすすめることを許す。その旨幕閣に上申致そう」

この「新田開発の儀、平右衛門の心一盃にすすめることを許す」は幕府の最高幹部の間でも承認されます。幕府としては異例のことです。これは事実上、代官と同じ権限を与えられたこととなります。川崎平右衛門は正式に大岡忠相直属の部下として、南北八十二ヶ村専任の責任者となります。

◆芝地開発

平右衛門は次に芝地開発と名付けた、未開墾地の開発に取りかかります。

長い間試行錯誤が続く、凶作で苦しんだこともあり、出て行く百姓はいても新しく入植する百姓はいませんでした。そのため未開墾地が広く残されていました。これを貧しい百姓に食料を与えながら開墾させます。開墾した土地は開墾した者に与え、年貢は三年免除します。食料は家族分も含めて支給され、肥料も無償で

貸与されるので、百姓は安心して開墾に励みます。

こうして新しい新田を増やし、同時に凶作に備えた備蓄をすすめます。備蓄した穀物は食いぶちのない百姓への手当として貸し付けることも出来ますし、余った穀物を売れば病人の手当もできます。

◆立ち帰り料の支給

平右衛門がもう一つ課題にしていたことは、せつかく畑を開いたのに作物が取れないために逃げだした百姓たちのことでした。そんな畑があちこちに荒れ放題になっていました。いわゆる耕作放棄地です。

平右衛門は逃げ出した百姓たちに、「今では農閑期でも井戸掘り、ため池の掘削などの事業で賃金として穀物が支給される」ことを広く伝え、村に戻ってくる場合には立ち帰り料として金三両を支給し、心配せずに農地を回復できる仕組みを作りたいと、幕府に願います。

平右衛門を絶対信頼している大岡忠相はすべてを了承します。平右衛門はさっそく新田の責任者や村人に、「帰ってきた者には立ち帰り料を渡すから、帰ってくるように」と伝えます。その話は人から人へ伝わり、江戸の町でも噂になりました。そして元の村人が次々と帰ってきます。

「おーい、五助、帰ってきたぞー」

「おう次郎、帰ってきたか。おう、おう、ばあちゃんも戻ってきたか」

「またよろしう頼みますじゃ」

「よかった。よかった」

「弥助も太助も戻ってきたぞ」

「さあ、さあ、うちへ来い。うまいうどんができるようになったからな、うどんを食わせるぞ」

「うどんもできるのか」

立ち帰り料の支給によって、村の人口も増え、耕作放棄地は姿を消しました。

◆飢饉に備えてヒ工蔵をつくる

次に平右衛門は、凶作に備えて、各村々にヒ工を少しずつ貯める村共有のヒ工蔵を作らせました。そこへ豊かな者も貧しい者も、毎年収穫の十分の一を出し合って貯めておくのです。灌漑や溜池が整備されたからはほとんど凶作を経験することもなくなりましたから、三年もするとヒ工蔵は一杯になります。翌年からは最初の一年分を取り出して江戸の市場で売却します。ヒ工は三十年たっても腐らない保存食ですから、売り時を見計らって売却するとい値段で売れました。蓄えたヒ工はみんな持ち寄ったものですから、売れた代金は村の共有資金となり、村の催しや、病人の手当てなどに自由に使える資金となります。

かつてのように、名主が個人個人から年貢を取り立てるやりかたに代わって、厳しいときは厳しいなりに村全体が助け合って責任を持ち、余裕のできた資金は村の共有にするという自治の仕組みが根づきます。こうして、あの極貧の新田村は豊かな村に姿を変えていきました。

平右衛門の手代（てがわり）を勤めた高木三郎兵衛が書き残した記録によると、十年の間に、立ち帰った百姓、あるいは出百姓の二男三男への分地などで、家数は三百軒増え、人数も千人余り増え、開墾した畑は二千町歩も増えて、開墾する土地はなくなったということです。

七、サクラ咲く村

◆桜を植える

農村の暮らしを自立させるためには、村人が安心して集まり、一緒に楽しむ場が必要です。古い村なら神社やお寺の境内がそうした役割を果たしていますが、新しく生まれた新田村ではあたらしい癒（い）やしの場が必要でした。たまたま玉川上水の兩岸の松並木が老朽化して植え替える時期になったとき、平右衛門はこれを桜並木にする計画を立てます。

桜を植え始めた時期についてはまだ平右衛門が新田世話役になる以前の元文二年（一七三七）という説と、実際に新田専任の役人になってからの寛保元年（一七四二）説がありますが、すでに元文二年（一七三七）には江戸の飛鳥山（現在の北区王子）では將軍吉宗が桜を植えさせ、これを庶民に開放し、春になれば誰でも自由に入場して無礼講で花見の宴が開かれるようになっていました。

元文元年に大岡忠相による武蔵野新田検地が行われた際、上坂政形は押立新田の栗林を見て、平右衛門に栗の上納を勧めています。すでに飛鳥山では桜の植樹が始まっていましたから、平右衛門は上坂代官との間で、武蔵野の百姓たちが集まって花見が出来るような場所を構想していたのかもしれない。実際の植樹は小金井村の関勘左衛門が担当したとの記録が残っていますから、おそらく小金井陣屋ができてから後だと思われま

平右衛門は吉野から種苗を取り寄せ、農閑期の百姓

のための扶食普請（ふじきぶしん）、つまり百姓を支援する公共事業として、桜の苗を栽培する苗場をつくります。これは現在の小金井市本町あたりにあったそうですが、その苗場で育てた苗を玉川の兩岸に植えました。桜が咲くようになれば、花見を開こうぞと、村人は一生懸命働きました。

後にこの桜は小金井桜と呼ばれ、江戸からたくさんの人が花見にやってくるようになります。そして小金井桜は「江戸近郊八景の内・小金井夕照」と題され、広重の浮世絵にまで描かれるようになります。

ついでながら、小金井桜は大正十三年に国の名勝地として指定され、多くの人々が花見やってくるようになります。その花見客のための臨時停車場として仮設された駅が現在の武蔵小金井駅のはじまりだと言われています。

上から力づくで替しつけることが一般的であった江戸時代に、この武蔵野新田では「一人はみんなのために、みんなは一人のために」という現代の協同組合の先駆けとなるような仕組みが生まれていたのです。

ちなみに、現代の協同組合組織は一八四四年にイギリス・ランカシャー地方でストライキに敗れ、失業した労働者が資金を出し合って生活物資を共同購入し、利益を分配し合ったロッチデール先駆者組合から始まったものです。

この武蔵野の新田村が平右衛門の指導によって協同の仕組みを確立したのは元文四年から延享五年にかけて、西暦で言うなら一七三九年から一七四八にかけてのことです。イギリスのロッチデール先駆者組合より百年も前のことです。

武蔵野の多くの街は、実は協同の村として誕生していたのです。

◆別れ

新田開発がはじまってから二十三年目の延享二年（1745）、大岡越前守忠相は自分の役割は終わったと、地方御用の役を離れます。享保の改革は幕府の立て直しに成功したのです。そして平右衛門が新田開発の役目から離れたのは二十七年目の寛延二年です。あの小金井橋でのお救い米配りからちよと十年目の春でした。

平右衛門は洪水対策の専門家でもありましたが、永年水害で苦しんでいる美濃国（みののくに）へ派遣されることとなります。平右衛門が旅立つとき、玉川土手の桜並木はもうかなり伸びて、見事な花をつけ始めていました。

そのときみんなで植樹した玉川土手の桜並木がつぼみを付けはじめていました。

「おい、サクラだ、サクラだ、サクラがつぼみを付け始めたぞ」

「平右衛門様、お帰りになられたときは、武蔵野は桜の村になりますぞ！」

平右衛門は村人に送られて、新しい任地に向かいます。

【合唱】いまにサクラの村となる

平右衛門はその後、長良川の治水工事を完成させると、いったん関東代官に戻りますが、二年後、今度は現在の島根県にある石見銀山の代官・奉行として派遣されます。そして明和四年（一七六六年）、幕府の勘定吟味役（幕府財政の監視役）に任命され、江戸に戻りますが、病に倒れ、七四歳で没します。

川崎平右衛門は押立村の名主から幕府の役人になりましたが、いつも働く者の側に立ち、働く者たちが力を合わせる喜びを見つけ出せるような事業を作り出しています。

平右衛門の没後、武蔵野新田、美濃国、石見銀山の人々は、平右衛門の徳を語り継ぎ、多くの慰霊塔や感謝の記念碑を建てております。



府中の森公園に立つ川崎平右衛門像

◆川崎平右衛門の歴史的功績

川崎平右衛門の功績については幕府の公的資料からある程度知ることが出来ますが、実際の人となり伝える資料は明和九年（一七七二年）の大火で焼失したこともあって、ほとんどありません。そのため、研究者たちも大変苦労されているようです。

農村の一名主から代官に取り立てられ、最後は幕府の勘定吟味役という大幹部にまで出世した人物ですから、とかく出世して偉くなった人物として語られがちです。あるいはまた、まれに見る合理的思考のできる天才との評価もあります。

しかし、震災からの復興が問題になっている現代か

ら振り返るとき、本当に知りたいのは、打ちひしがれた百姓たちが、なぜあのような大事業を成し遂げるまでに立ち直ったのかということです。それは力に頼る指導や損得勘定に動かされたからではなく、人間の間に眠る協同性を自覚し、働く喜びを知ったからだと思われま

す。平右衛門についてのさまざまな文献を調べると、断片的ではあっても、大岡忠相や上坂政形が平右衛門に対して人間的に好感を持っていたことが想像されます。そしてなによりも、村をつくる村民から愛されたようです。

平右衛門の没後、武蔵野新田の人々は平右衛門の功績を讃え、小金井市関野町の真蔵院に供養塔を建てています。また、国分寺市の妙法寺や東村山市の観音寺にも謝恩塔が建てられています。埼玉県鶴ヶ島には「川崎大明神」のほこらを建てて祀った遺跡が残っていますし、坂戸市の神明神社境内にも没後九十六年目の嘉永六年に「川崎大明神」と刻まれた記念碑が残されています。永く語り伝えられていたのでしょうか。

享保の改革の大きな特徴は、破綻しかかった幕府財政を回復させるために、世襲の官僚ではなく、農民出身者が活躍したことです。永年解決のつかなかった荒川、酒匂川の治水工事を成功させた田中丘隅、飢饉に備えて全国的に薩摩芋を普及した青木昆陽、そして、享保の改革最大の事業である武蔵野新田八十二ヶ村を完成させた川崎平右衛門と、いずれも農民出身者でした。農業の原点は協同作業であり、農民出身の指導者たちは農民特有の協同の力を知っていたと言えます。

こうした農民の自助協同を原則とした改革は、その

後江戸後期の二宮尊徳による報徳社の活動や、大原幽学による農民の協同組織・先祖株の活動があります。いずれも飢饉や災害に揺れた時代であり、農民自身の自立を原則とする運動でした。平右衛門の協同による村作りの先例は、こうした人々にも影響を与えたと考えられます。

【参考文献】

- ・『代官川崎平右衛門の事績』 渡辺紀彦著（一九八八年刊）
- ・『わたしたちのまち小金井』
- ・『大岡忠相と新田開発』 小金井市誌編纂委員会編（一九八八年刊）
- ・『江戸東京たてももの園編（二〇〇二年刊）』 江戸東京たてももの園編
- ・『府中市郷土の森博物館・紀要21号（二〇〇八年刊）より』 府中市郷土の森博物館
- ・『川崎平右衛門定孝関連資料の所在と』 御代官川崎平右衛門発起書 現代語訳 馬場治子著
- ・『府中市郷土の森博物館・紀要22号（二〇〇九年刊）より』 府中市郷土の森博物館
- ・『川崎平右衛門が開いた武蔵野新田御栗林について』 野田政和著
- ・『代官川崎平右衛門』 府中市郷土の森博物館編（二〇〇九年刊）
- ・『霊松院殿忠山堂栄大居士川崎平右衛門定孝の生涯』 木野主計著（二〇一〇年）
- ・『霊松院殿忠山道栄大居士川崎平右衛門定孝編年史料集』 川崎平右衛門定孝関係史料の釈文と解題 木野主計編（二〇一〇年）

武蔵野新田および川崎平右衛門略年表 ★印は平右衛門にかかわる事項

西暦	和 暦	年齢	出 来 事
1694	元禄 7 年	1	★多摩郡押立村川崎家の長男として生まれる。幼名・辰之介。
1703	元禄 16 年	10	関東を中心に 元禄大地震が起こる 。死者 6,700 人。流失家屋 28,000 軒。
1707	宝永 4 年	14	関東ら四国にかけて、 宝永大地震が起こる 。49 日後、富士山大噴火が起こる。
1709	宝永 6 年	16	第六代将軍徳川家宣就任。
1713	正徳 03	20	第七代将軍徳川家継就任。
1716	享保元年	23	第八代将軍徳川吉宗就任。
1717	享保 2 年	24	大岡忠相、江戸町奉行および地方御用を命じられる。
1722	享保 7 年	29	大岡忠相地方御用（国土開発業務）開始 。日本橋に新田開発の高札。
1723	享保 8 年	30	★父平右衛門没し、平右衛門を襲名。押立村名主となる。
1725	享保 10 年	32	★上坂安左右衛門が代官となり、平右衛門との信頼関係生まれる
1732	享保 17 年	39	享保の大飢饉、サツマイモの普及がはかれる 。
1735	享保 20 年	42	★平右衛門、村民協同で多摩川用水路修復工事を完成させ、幕府の信頼を得る。
1736	元文元年	43	大岡忠相による武蔵野新田検地が行われる。
1738	元文 3 年	45	2 年続きの 武蔵野新田凶作 、吉宗の厳命で上坂代官と平右衛門、新田農民救済にあたる。
1739	元文 4 年	46	★苗字帯刀許され、川崎平右衛門定孝を名乗り、 新田世話役となる 。 ★幕府から 4060 両借入し、その利金を百姓に支給する 養料金制度実施 。
1740	元文 5 年	47	★ 武蔵野 82 加村専任 となり、思うように事業を進めてよいと認められる。
1741	寛保元年	48	★一旦逃げ出した者も、帰村すれば立ち帰り料（再開準備資金）を支給。 ★芝地開発料実施。（百姓に食料を支給して未開墾地を拓き、共有財産としての備蓄をはかる）
1743		50	★上坂代官は勘定方へ移動し、 平右衛門は支配勘定格（幕府勘定所役人と同格） となる。
1745	延享 2 年	52	★大岡忠相の関東地方御用引退により、平右衛門は勘定奉行支配下となる。 第九代将軍徳川家重就任。徳川吉宗は西丸へ入り院政を敷く。
1947	延享 4 年	55	★甲州より苗木を取り寄せ、新田内に植林、10ヶ村に管理を任せる。
1749	寛延 2 年	57	★ 平右衛門、武蔵野新田の支配から離れ 、美濃本田代官となり長良川治水に当たる。
1751	寛延 4 年	58	6 月、徳川吉宗没。12 月、大岡忠相没（75）。
1754	宝暦 4 年	63	★平右衛門、御目見得以上となる。（将軍に謁見できる資格）
1759	宝暦 9 年	65	上坂政形没（64）
1760	宝暦 10 年	67	★平右衛門、関東代官に戻る。将軍交替、第十代将軍徳川家治。
1762	宝暦 12 年	69	★平右衛門、石見国大森代官・奉行（石見銀山の最高責任者）となる。
1767	明和 4 年	74	★平右衛門、勘定吟味役（幕府財政全般を監視する役）となり、江戸へ帰任。 ★平右衛門、江戸に帰着するも病に倒れ、没。74 歳。